II Kings 7:1-9, 8:1-29, 9:1-4

7章

テーマ:エリシャによる豊かさの約束が成就する。

7章は、6章の物語の続きです。エリシャに包囲攻撃の責任があるとして、イスラエルの王は彼を殺すために死刑執行人を送ります。ところが、神さまはエリシャに前もって警告され、彼に飢饉が次の日に終わるという良い知らせを与えられます。

(II 列王記7:1)「エリシャは言った。『【主】のことばを聞きなさい。【主】はこう仰せられる。「あすの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。」』」
1セアの上等の小麦粉は約4ペック、つまりおよそ1ブッシェル(約8．8リットル)になりました。1シェケルはおそらく、約65セント(訳注:マギー博士の当時では234円、2011年の今だと53円くらいです)ほどの価値でした。それはインフレが終わったことを意味しています。彼らは小麦粉の大安売りをするということです。どのようにしてそんなことが起こりえるのでしょう?アラム軍が町の城壁の外で宿営しており、だれも町に出入りすることを許さないのに、どのようにして食物が待ちに運び込まれると言うのでしょう?見たところ、王はエリシャの無謀な預言を信じたようです。なぜなら、王はこのとき、エリシャの命を取らなかったからです。ところが、王の腹心はこの考えをあざ笑いました。

(II 列王記7:2)「しかし、侍従で、王がその腕に寄りかかっていた者が、神の人に答えて言った。『たとい、【主】が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。』そこで、彼は言った。『確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。』」
この予告は、次の日に文字通り成就しました。

さて、場面は町の城壁の外にいる希望を失ったあわれな一団の人々に変わります。

(II 列王記7:3-5)「さて、四人のツァラアトに冒された人が、町の門の入口にいた。彼らは互いに言った。『私たちはどうして死ぬまでここにすわっていなければならないのだろうか。たとい、私たちが町に入ろうと言っても、町はききんなので、私たちはそこで死ななければならない。ここにすわっていても死んでしまう。さあ今、アラムの陣営に入り込もう。もし彼らが私たちを生かしておいてくれるなら、私たちは生きのびられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。』こうして、彼らはアラムの陣営に行こうと、夕暮れになって立ち上がり、アラムの陣営の端まで来た。見ると、なんと、そこにはだれもいなかった。」
彼らはツァラアトに冒されていたので、社会から除外され、食物を持ってきてくれる親類や友人たちに頼っていました。今、町囲みの中の人々が飢えているのですから、もちろん彼らのために余裕があろうはずもありません。

前にも言ったように、ツァラアトは罪の型です。私たちへの適用は、私たちがキリストに行く前は、彼らと同じような切羽詰った状況にいました。私たちはツァラアトに冒された人々のように、この世で死人の間に座り、希望もなく、神さまもありませんでした。

ツァラアトに冒された人たちは、何も失うものはないことに気づき、敵のあわれみにすがってみようと決心しました。彼らがアラムの陣営に来ると、そこにはだれもいないことを発見します。あの大軍に何が起こったのでしょう?おそらく10万人かそれ以上はいたことでしょう。

(II 列王記7:6-7)「主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせられたので、彼らは口々に、『あれ。イスラエルの王が、ヘテ人の王たち、エジプトの王たちを雇って、われわれを襲うのだ』と言って、夕暮れになると、彼らは立って逃げ、彼らの天幕や馬やろば、すなわち、陣営をそのまま置き去りにして、いのちからがら逃げ去ったのであった。」
接近してくる軍隊の音が彼らをパニックに陥れました。アラム人は、秩序正しく行進しませんでした。彼らが逃げたとき、自分のためだけを考えていました。彼らは夜、大急ぎで行ってしまいました。

（II 列王記7：8）「このツァラアトに冒された人たちは、陣営の端に来て、一つの天幕に入り、食べたり飲んだりして、そこから、銀や金や衣服を持ち出し、それを隠しに行った。また、戻って来ては、ほかの天幕に入り、そこから持ち出し、それを隠しに行った。」
この時代、軍隊は必要になるすべての食料を持っていました。これは長い行軍でした。丘の上の町、サマリヤを包囲攻撃していたのです。あわてて逃げるときに、彼らはすべてのもの、自分たちが持っていた軍需品のすべてを置いていきました。アラム軍が逃げたあと、ツァラアトに冒された人たちは陣営に入って行って、食べられるだけ、飽きるほどグルメな食事をしました。そのあと、彼らが一生かかっても使い切れないような金と銀を見つけて隠しました。

（II 列王記7：9）「彼らは話し合って言った。『私たちのしていることは正しくない。きょうは、良い知らせの日なのに、私たちはためらっている。もし明け方まで待っていたら、私たちは罰を受けるだろう。さあ、行って、王の家に知らせよう。』」
興奮が冷めると、彼らは我に返ります。
「町の人たちは飢えているのに、私たちは飽きるほど食べている。彼らにも良い知らせを知らせないといけないぞ！」
　ここいは偉大な霊的レッスンがあります。今このとき、あなたも私も、神さまのみことばを楽しんでいます。今日は良い知らせの日であり、私たちはここに座って楽しんでいるのです。ほかの人たちにみことばを伝えることはどうしたのでしょう？霊的に飢えている人たちに神さまのみことばを分かち合うために、あなたは何をしておられますか？飢え渇いている心に、神さまのみことばを伝えなければなりません。ある人は私に言いました。
「私は、話もできないし、教えることもできないし、歌うこともできないし、お金儲けをする以外には、ほとんど何もできないんです。」
神さまはこの人にお金をもうける賜物を与えられたのです。彼は、お金を失うことが単にできないのです。彼が触るもののすべてが黄金になります。私は、彼の能力は神さまからの贈り物だと信じます。そして、彼は確かに、神さまのみことばを伝えるためにその賜物を使っています。神さまは私たちひとりひとりが、神さまにいただいた賜物を用いて神さまのみことばである良い知らせを宣べ伝えることを期待しておられます。私たちは、この絶望的なときに、私たちの平安をとめておいてはなりません。
　ツァラアトに冒された人たちが王に良い知らせを伝えたあと、イスラエルの子らは放棄されたアラムの陣営に入って行って、何千人もの軍隊を養うことができるほどの食料を見つけました。食料は豊かにありました。サマリヤのスーパー・マーケットは大安売りをしました。安くで食べ物を買うことができました。もう食べるために動物の頭など買わなくても良いのです。その代わりに、フィレ・ミニョン（訳注：高級なステーキ肉）を買うことができたのです！エリシャの預言は、文字通りに成就しました。

8～10章

***テーマ**：悪に対するさばき。*
イスラエルの人々は、神さまの奇蹟的な助けをすぐに忘れて、彼らの罪に戻ってしまいました。そこでまた、彼らは飢饉のさばきに苦しみます。

エリシャによる飢饉の予告

（II 列王記8：1－2）「エリシャは、かつて子どもを生き返らせてやったあの女に言った。『あなたは家族の者たちと旅に立ち、あなたがとどまっていたい所に、しばらくとどまっていなさい。【主】がききんを起こされたので、この国は七年間、ききんに見舞われるから。』そこで、この女は神の人のことばに従って出発し、家族の者を連れてペリシテ人の地に行き、七年間滞在した。」
エリシャはシュネム人の女性に、この地を離れてほかのところに行くように命じました。なぜなら、この地には、7年間の飢饉が訪れようとしていたからです。彼女はエリシャを信じ、彼の指示に従いました。彼女は家

族の者を連れてペリシテ人の地に行き、飢饉の間そこに滞在しました。今一度、飢饉は北王国に対する神さまのさばきでした。

正直私は、最近わが国を襲ったいくつかの悲劇は、私たちの国に対する神さまの警告だと思います。わが国を嘗め尽くした地震、ハリケーン、嵐やそのほかの悲劇的な災害は、立ち止まって、考え、私たちの生活を変えなさいという神さまの警告なのではないかと思います。

シュネム人の土地が回復される

(II 列王記8:3－6)「七年たって後、彼女はペリシテ人の地から戻って来て、自分の家と畑を得ようと王に訴え出た。そのころ、王は神の人に仕える若い者ゲハジに、『エリシャが行ったすばらしいことを、残らず私に聞かしてくれ』と言って、話していた。彼が王に、死人を生き返らせたあのことを話していると、ちょうどそこに、子どもを生き返らせてもらった女が、自分の家と畑のことについて王に訴えに来た。そこで、ゲハジは言った。『王さま。これがその女です。これが、エリシャが生き返らせたその子どもです。』王が彼女に尋ねると、彼女は王にそのことを話した。そこで、王は彼女のためにひとりの宦官に命じて言った。『彼女の物は全部返してやりなさい。それに、彼女がこの地を離れた日から、きょうまでの畑の収穫もみな、返してやりなさい。』」

飢饉が終わってシュネム人の女性が自分の土地に帰ってきたとき、見たところ彼女の土地にだれか別の人が住んでいたようです。同じときに、神さまのご摂理によって、王が預言者エリシャのあまり知られていないわざについて訊ねており、ゲハジが王にエリシャがシュネム人の女性の息子を生き返らせたことを話していました。王は、彼女の所有地と、その地の収獲をみな彼女に返してやるようにと、決定を下しました。

エリシャ、ハザエルの背信を予告する

ここにもうひとつ、エリシャの生涯の中でかなり目立つできごとが書かれています。アラムの王がエリシャを捕らえて殺そうとしたことを思い出されると思います。今、その王は年を取り、しかも病気でした。

(II 列王記8:7)「エリシャがダマスコに行ったとき、アラムの王ベン・ハダデは病気であったが、彼に『神の人がここまで来ました』という知らせがあった。」

王は、エリシャが自分を健康にしてくれる、と思いました。彼自身の命がエリシャの手にかかっているかも知れないという事実をかんがみて、もちろん、王は彼の頭の髪の毛にさえも触ろうとはしませんでした。

(II 列王記8:8)「王はハザエルに言った。『贈り物を持って行って、神の人を迎え、私のこの病気が直るかどうか、あの人を通して【主】のみこころを求めてくれ。』」

ハザエルはエリシャに会いに行きました。彼はベン・ハダデの軍隊の将軍でした。彼については、I 列王記19:15に次のように書かれています。

(I 列王記19:15)「【主】は彼に仰せられた。『さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油をそそいで、アラムの王とせよ。』」

ここで、「彼」と言われているのはエリヤです。ですから、ハザエルはもう何年も前に王として油をそそがれていたのです。彼はただ、年老いたベン・ハダデが死ぬのを待っていました。それが息子であっても、将軍であっても、そのほかの誰であったとしても、王の後継者が王の葬式に多くの涙を流すのは難しいことだということを、理解することができますね。なぜなら、彼の後継者が力を握るのは、その王の葬式のときだからです。そこで、ハザエルはエリシャに会いに行きましたが、ただ、彼はそれほど熱心に行ったのではないと思います。彼は王からのすごい贈り物を持ってエリシャのところに行きました。

(II 列王記8:9－10)「そこで、ハザエルはダマスコのあらゆる良い物をらくだ四十頭に載せ、贈り物として携えて、彼を迎えに行った。彼は神の人の前に行って立ち、そして言った。『あなたの子、アラムの王ベン・ハダデが、「この病気は直るであろうか」と言ってあなたのところへ私をよこしました。』エリシャは彼に言った。『行って、「あなたは必ず直る」と彼に告げなさい。しかし、【主】は私に、彼が必ず死ぬことも示された。』」

エリシャが与えたメッセージに注目してください。「あなたは必ず治るが、生きることはない。」二枚舌のように聞こえますよね。王が必ず死ぬ、と聞いたときのハザエルを想像することができますね？彼はにやっと笑い、そして微笑みます。なぜなら、自分が王になるからです。

（II 列王記8：11）「神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、」
エリシャの、何もかも分かっている目は、ハザエルが恥じるほどにかれをじっと見つめました。そしてエリシャは泣き出しました。

（II 列王記8：12）「ハザエルは尋ねた。『あなたさまは、なぜ泣くのですか。』エリシャは答えた。『私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八つ裂きにし、妊婦たちを切り裂くだろう。』」
ハザエルはびっくりしました。
「あなたさまは、なぜ泣くのですか？あなたさまはなぜ、あなたさまのいのちを取ろうとしたこの王のために、泣かれるのですか？」
エリシャは、王のために泣いているのではありませんでした。エリシャは自分の民を愛していました。彼は自分の神さまを愛していました。彼は神さまが自分にくださった奉仕を愛していました。彼は預言者でした。彼は心を痛めていました。なぜなら、ベン・ハダデも十分に悪かったのに、ハザエルはそれ以上に人々に心痛を与えるようになるというのです。エリヤがハザエルに王として油をそそぎ、そしてハザエルは悪を行わないと告白しましたが、エリシャはもっと良く分かっていました。

（II 列王記8：13）「ハザエルは言った。『しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなだいそれたことができましょう。』しかし、エリシャは言った。『【主】は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。』」
彼が犬だったかどうかは私には分かりませんが、どちらにしても、彼はそんなだいそれたことを“した”のです。

（II 列王記8：14－15）「彼はエリシャのもとを去り、自分の主君のところに帰った。王が彼に、『エリシャはあなたに何と言ったか』と尋ねると、彼は『あなたは必ず直る、と彼は言いました』と答えた。しかし、翌日、ハザエルは毛布を取って、それを水に浸し、王の顔にかぶせたので、王は死んだ。こうして、ハザエルは彼に代わって王となった。」
エリシャが予見したのは、このことです。事実上エリシャはこう言ったのです。
「もちろん、王は自分が回復すると聞けば喜ぶでしょう。そして、あなたはそのように王に語ります。でも、あなたが王を生かしてはおかないのです。」
　この章の残りの部分は、注意深く‘分裂した王国の王たちの年表’にそって見ていけば、それほど混乱しないですみます。

（II 列王記8：16－18）「イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年に――ヨシャパテがユダの王であったが――ユダの王ヨシャパテの子ヨラムが王となった。彼は三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻であったからである。彼は【主】の目の前に悪を行ったが、」
“なぜ”神さまが信者と未信者の結婚を喜ばれないか、お分かりになるでしょう。ヨラムは神さまを恐れていたヨシャパテ王の息子であったのに、彼はアハブとイゼベルの娘と結婚して、彼女の邪悪な影響の下に「イスラエルの王たちの道に歩んだ」のです。
　さて、私たちはイスラエルが偉大な国家として衰退していくのを見て行きます。エドムとリブナの両方が、イスラエルに背きます。そして、ヨラムが死に、アハズヤがユダの新しい王になります。彼はイスラエルの王、ヨラムと力を合わせてアラムに対して戦います。ヨラムはけがをし、アラム人に負わされたその傷をいやすために、イズレエルに帰りました。

（II 列王記８：29）「ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにラマでアラム人に負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来た。ユダの王ヨラムの子アハズヤは、アハブの子ヨラムが病気であったので、彼を見舞いにイズレエルに下って行った。」
次の章で、ヨラムがイズレエルで療養をしている間に彼に何が起こったかを見て行きます。

エフー、イスラエルの王として油をそそがれる

この章を始めるにあたって、私たちは、ユダの王アハズヤがヨラムをイズレエルに訪ねたことを覚えておく必要があります。ヨラムはイズレエルで、戦争で受けた傷をいやしているところでした。みたところ、彼はとても悪い状態だったようです。

（II 列王記９：１－４）「預言者エリシャは預言者のともがらのひとりを呼んで言った。『腰に帯を引き締め、手にこの油のつぼを持って、ラモテ・ギルアデに行きなさい。そこに行ったら、ニムシの子ヨシャパテの子エフーを見つけ、家に入って、その同僚たちの中から彼を立たせ、奥の間に連れて行き、油のつぼを取って、彼の頭の上に油をそそいで言いなさい。「【主】はこう仰せられる。わたしはあなたに油をそそいでイスラエルの王とする。」それから、戸をあけて、ぐずぐずしていないで逃げなさい。』そこで、その若い者、預言者に仕える若い者は、ラモテ・ギルアデに行った。」
若い預言者は、エリシャが命じたことを行いました。エリシャのすることは劇的ではないことに気づかれることでしょう。エリシャは誰かに油をそそいで王とするなら、若い預言者を送らないで自分で行けばよかったのにと思われるでしょう。思い出されるでしょうが、サムエルはサウルに油をそそいで王としました。そして、ダビデに油をそそいで王とするためにも、彼は行ったのです。エリシャが自分で油をそそいで誰かを王にしたかったろうに、と思えますが、そうではありませんでした。エフーに油をそそいで王とするために、エリシャは若い預言者を送り、その預言者は秘密裏に、また個人的にことを行いました。おそらく、秘密裏に、個人的に油をそそぐために若者を送ったのでしょう。若い預言者の動機を勘ぐる者はいないでしょうから。

そのようにして、エフーは王として油をそそがれました。彼は聖書の中でももっとも血なまぐさい悪漢のひとりですが、それでも、いろいろな意味で神さまのみこころを行ったのです。神さまは、エフーがアハブの家系からすべての男子を削除するので、イスラエルの中にアハブの男子はひとりも残らない、と言われたのです。